

## 美しい女

森の中は暗く、沈んだ緑と焦げ茶と黄色が点描画のように私のまわりを取り巻いていた。

足許の地面には厚く朽ち葉がつもり、独特の匂いがした。すると蛇が鱗を光らせて、私の行くてを横切る。頭上では名も知れぬ鳥があざけるような鳴き声を上げた。

当てのない放浪の旅を続ける私が今、すりきれた緑色の外套に麻袋をかっいでひとり歩いているのはロラストの山々の裾野のあたり、ゴープという小さな村に続く道のはずだった。

そろそろ森を抜けて、村の家並みが見えてきてもいい頃だったが、一向にその気配はなく、葉むらの中から差し込んでくる陽射しは次第次第に弱まってくるようだった。

前の町で胡麻塩頭の男から買った二十ダズンの地図はどうやら余り細かいことを気にする人間の手になる物ではないらしい。空腹と夕暮れが気になりだした頃、突然、眼前が開けた。

沼が森の中に忽然と出現した。向こう岸まで七十メートル（約二十メートル）あるかなしかという小さな円形の沼が、深い緑色の水を湛えて私の前にあった。

私は草深い水辺に下り立ち、水面を眺めた。水はきれいにすんでいるのだが、光の具合のせいかな、あまり深い所までは見えなかった。魚や虫の姿もない。

沼によって森の緑がきれいに丸く切り取られ、天窓のような空がのぞいていた。薄灰色の雲がかかり濁った水色と大まかな斑模様を成している。ゆっくり動く雲の間からぼんやりとした陽光がさし、沼の水を照らしていた。

風はなく、水面には全くといってよい程波がなかった。景色に命というものがあるのなら既にこの光景の寿命は尽きているかのよ

うに思えた。五十年前も前に死んだ無名の風景画家の作品の中に立っているような気分だった。

私は草むらに腰を下ろし、手で沼の水をすくった。冷たかったが同時に何か柔らかいぬめりとした肌触りのようなものがあった。一口飲んでみると歩き疲れた体に少しばかり力が沸いてくるような気がした。

地図を取り出して見てみたが、こんな沼がある、とは書かれてはいない。恐らくは猟師たちが使う山道に私は迷い込んでしまったのだらう。おおよそ、村の入り口に近いことは間違いないようだったから何とか日暮れまでには行き着けるようにも思えた。

私は仰向けに寝転び、木々の枝葉と雲がつくる影絵のような景色を眺めた。眠気を催し、目をつぶった。まぶたの裏には暗い安らぎがあった。

そのとき、水音が聞こえた。ごく静かな、かすかな葉のざわめき以外の物音はないこの沼の静けさを決して破る音ではなかったが、確かに何か水にはいったような音が聞こえた。

私は体を起こし、まわりを見回した。動く物は見えない。水面にも波紋はなかった。

だが、向こう岸に今まではなかった物があった。鮮かな赤い色の物が水辺の木の枝にかけられていた。今にも水につきそうにだらんと下がっているそれは女の着る衣のようだった。

こんな人知れぬ沼にひとり水浴に来る女がいるものだろうか。水面には波ひとつない。さっきの水音は赤い服の持ち主が水にはいった音ではなかったのだろうか。

真紅の布がひとつ加わっただけで風景はまるで新しい命を得たように変わって見えた。木々の葉の緑は鮮かにつやつやと輝き、水はよりすんだ青味を帯びた色に変わって行くように見える。空さえ、雲が薄くなつて光があふれていくようだった。

再び、水音がした。とても深い所から地の底を伝って来たかのよ

渦巻きがゆつくりと巻いている。沼の中心の何箇所かからは小さな抱がぶくぶくと沸きあがっている。

何がこの沼に起こるのかと私はじつと見つめていたが、始まった時と同じように水面の異変は静かに止んだ。

そして、向こう岸、赤い服の下に女が浮かび上がって来た。ゆつくりと、まるで水蛇が頭をもたげるように、青緑の水を割って白い背中が現われ、滑らかな肩が、黒い髪があらわれた。

女は水からあがり、美しい後ろ姿を露にした。遠目に見ても、その体は一千人の男を惑わすのに十分な魅力をもとっていた。

肉付きのよい豊かな尻が細くくびれた腰と完全な調和を成している。水に濡れて光る背中を見ているだけで七十メートルの沼を飛び越えて、抱き着きたくなるようだった。

女はマタハンの後宮の女も顔色を失くすような優雅な動きで身をくねらせ、赤い衣服をまとった。水に濡れた長い髪が邪魔をして、顔立ちはよく見て取ることが出来ない。沼に飛び込んで泳いで行きたい衝動にかられた。

やがて女は赤い長衣を身につけ、金と緑の帯を締めると、(裸身が隠れたからといってその艶やかさは全く変わりはしなかった) 森の奥へと消えていった。

村にはいったのは金色の夕日が森の向こう側に見えなくなる頃だった。

不思議な女の後を追おうとしたが、赤い服がかかっていた木の所まで行き着くと、もう女の姿は見えなかった。だが森の中にはどうやら道らしき下草の薄い部分が続いており、それをたどって歩くとほどなくゴープの村にたどり着くことが出来たのだ。

村には木を組んでつくられた小さな家がちやちやと狭い道を挟んで立ち並んでいた。村のまわりは狭い畑が囲んでおり、その外側には森と山が覆い被さるように迫っていた。

峠を越えて、オストーンの街に至る道が通っているので、旅商人

らしき者や荷車も通りには見られ、それなりに栄えている村のようだった。

村のまん中あたりに一軒宿屋があった。コラル亭と書かれた看板は大きくひび割れており今にも二つになりそうだった。主の老人は比較的愛想よく、私が扉をくぐると笑顔を作って挨拶をした。

「お客さん、どこから来なすつたね」

「サンジェリイから」

「おお、それはまた遠い都から、こんな山奥まで……」

「只の放浪者さ」

案内された部屋は二階の通りに面した部屋で裝飾らしきものは何もなかったがきれいに掃除された気分のいいものだった。私は寝台に身を横たえて目を閉じた。まぶたの裏の暗間に白くぼうとしたものが現われた。

赤い衣のあの女の裸身だった。柔らかな曲線を描き煽情的に動く白い背中が蜚のように妖しく浮かびあがっていた。

女は今、真つ赤な長衣を脱いでいくところだった。誰も見ていない者はいなくても、誰かの視線を釘付けにする仕草は決して忘れることはないようだった。

女は衣をあの枝にかけ、水中に姿を沈めた。青緑のどこまでも深いように見える水の中にすうつと沈んで行った。

女はそれきりあがってはこなかった。私はいつまでもいつまでも待つている。ここには夜も星もなかったが、それでも時が流れて行くのがわかった。幾百、幾千の年月が流れたが、女は沼の中に沈んだぎりだった。私は女の姿を求めて、欲望に身を焦がし、のたうち回った。どんなことをしてもあの女を抱きたかったが為す術はなく、ただ、沼の縁で待ち続けるだけだった。

気がつくとき汗をびっしょりかいて寝床に横たわっていた。開け放した窓から黒い夜空と白く光る星々が見えた。夜風は冷たく、体が冷たくなって行くのを感じた。

階段を降りると主が帳場で居眠りをしていた。洋灯の光が顔中に

刻まれたしわを際立たせていた。

「聞きたいことがあるのだが」

目を明けた老人の顔には眠りを邪魔された苛立ちが浮かんだがすぐに職業的な笑みの中にそれは消えた。

「何でしょう」

「酒場はどこにある」

「この建物の裏手は酒場になってますよ。この廊下を行けばいいんです」

「ありがとう。それから、村の東の森の中に小さな沼があったが、あの沼に何か云われとかはないのかい」

「沼で何か見たんですかい」

「いや、きれいな景色しか見えなかったがね、僕はこのあたりの山々に伝わる伝承や昔話を調べているのさ」

主は何も知らないと言ったが、嘘をつくのは下手だった。

廊下を折れて扉を開けるとそこは酒場の裏口になっていた。十数人の男たちが木の円い酒杯を傾け、この地方でよく飲まれているガーズ酒に酔いしれていた。

私が入って行くと男たちの視線が一瞬集まった。陽気な話声が途切れて、私は言い知れぬ敵意に似たものを感じた。だが、すぐに私たちはそれぞれの宴に戻り、酒場にはざわめきが戻った。

私は円い太い木を輪切りにした卓の間を歩き店の入り口近くの空いている席に向かった。そのとき、私は客の中に女がひとりいることに気付いた。

彼女は入り口近くの席で壁の方を向いて、肘をつき、ひとり飲んでいた。若い小柄なやせた女だ。黒い髪を肩のあたりで短く切り揃えているのはじめは女とわからなかったのだ。

私は彼女の向かいの席に座り、ガーズ酒と料理を幾つか注文した。

女ははじめ私が前に座ったことに気付かないようだったが、私が倒れそうになった酒瓶を起こしてやると顔を上げた。朴訥な顔付き

だったが若く美しいと言ってよかった。黒い大きな瞳は普段なら明るさに満ちているに違いなかったが、今は酒と悲しみの為に曇っていた。

「なんだい、あんたは。よそへ行ってくれよ」

女はしばらく私の顔を見ていたが、急に口調を変えて言った。

「あんた、この村の男じゃないね」

「ああ、旅をしている。今日この村に着いたんだ」

女は顔を崩し、喉の奥でくっくつと笑った。かなり酔っているようだ。

「そうかい、ねえ、あんた、あたしはきれいかい」

女はそういうと短い髪をかきあげ、桃色の唇を突き出してみせた。そういう仕草の似合う女ではなかった。

「ああ、魅力的さ。ひとりかい」

女は手にした酒杯にこぼれんばかりに酒を注ぐと一気に飲み干した。私は茸と野菜をゆでた料理をつづいた。

「ふん。あんたはよそ者だからね。この村の男どもと違ってあいつの魔術にはまだかかっちゃいないんだよ。だからちゃんとあたしのことを見てくださいよ。あいつらときたらさ……」

女は振り返って男たちをにらみ、頭をふった。

「この村には魔道師がいるのかい。東部の国々では魔道師たちが大きな力を持つているとは聞いていたが」

「あんた、西から来たのかい」

私はサンジェリイの話をしばらくした。西部の豊かな都には東部の人々は憧れと羨望を持っていることが多い。彼女も例外ではなかった。

「そんな大それた魔法使い様じゃあないよ。男をだまらかして骨抜きにしていく魔女さ」

女はナーザと名乗った。私はスナブ・ランケンという東部でも珍しがられる名前を告げた。

ナーザは都の話が終わると声を低くし、ささやくように言った。

「いいかい、魔女がいるんだよ。魔女が村の男たちの魂をむさぼり食っているんだ」

女は大きな目を釣り上げた恨みのこもった顔付きになった。私は彼女に酒をついだ。

「その話を聞かせてほしいな」

私の脳裏には沼の女が浮かび、また白い裸身をさらしていた。ナーザは確かに美しかったが、顔も見えないあの赤い衣の女の方が遙かに魅力的に思えた。彼女の姿の上に白い体の幻が覆い被さり、私の内に欲望が目覚めた。

「ああ、みんな教えてあげるよ。あいつにつかまらない内にはやくこの村から出た方がいい。旅商人の中にはあいつの虜になってこの村にいついちまってる奴もいるくらいだからね。」

「あいつの名前はリンシヤムっていうんだ。村の外れ、森の入り口近くの家にひとりで住んでる。何でも都を追われた貴族の娘だつて噂もあるけどそんなの嘘つ八さ。あたしは知ってるんだ。あいつはデウムさ。デウムなんだ」

ナーザの話はよくわからない所も多かったが、おおむね次のようなことだった。村にリンシヤムが現われたのは半年ほど前のことだった。ある晩、このコラル亭の酒場に真っ赤な長衣をまとつて現われ、たちまち村中の男の注目するところとなった。村にも（あたしのようにね）美しい女は幾人もいたが、男たちはリンシヤムの前では他の女は木彫りの人形か何かの様に見えるらしく、妻をめぐっている者も恋人のいる者も、そうでない者もこぞつてリンシヤムの心をひくことに夢中になった。

彼女を巡って何件かの刃物沙汰が起き三人の男が死んだ。そのうちのひとり今年五十九になる孫が四人いる村長の弟だった。

リンシヤムは数日ごとに酒場で、あるいは町角で、男たちに囲まれ、毒々しいいやらしい笑みを投げ掛け、（ナーザの言葉を借りればだ）男たちを誘惑した。彼女は男たちに様々の難題を持ちかけ、さまざま恋の言葉を振り撒き、男たちの心を煽り立てた。

「その頃からなんだ、姿を消す男が出て来たのは」

ナーザはまた新しい杯をあげながら言った。だんだんろれつが回らなくなつてきている。

「村の男どもがある日いなくなるんだ。心配した上さんや家族が捜し回つても見つからない。三、四日たつと帰つて来るんだけど、もう違う人間になつてるのさ」

「どういふことだい」

ナーザは短い髪をかきあげ、頭を掻き回した。

「そうさ、別人になつちまうんだよ。まるで、ふぬけさ。そりや毎日皆ちやーんと仕事して飯も食つてるけど、まるで生氣というものが無いんだよ。誰かに操られてる人形みたいにぎくしゃくしてる。魂が抜けちまつたとしても言えばいいのかな。ほら、あいつもそうだよ」

ナーザは店の奥の方でひとりで飲んでいる若い男をそつと指差した。男は静かに酒を飲んでる。雄かにそう言われれば余り元気な様子にも見えず、杯を持った手の動きも妙にぎこちないような気もした。

「あいつはずつと前からあの席で酒を飲んだのさ、でも前は陽気でいつも大騒ぎしてた。神隠しにあつてからはあの様さ。ろくろく誰とも口もききやしない」

ナーザは溜息をつくと卓に肘をついて首を垂れた。酔っているせいで感情の起伏が激しいようだった。赤らんだ頬を涙が流れ落ちた。

「くそう、皆あの女が悪いのさ。あの化け物が……誰も気付かないんだ。皆知らないんだ。あいつが怪物だつてことを」

「もう少し聞かせてくれないか。リンシヤムのことを」

ナーザは鼻をすすり上げ、真っ赤になった目で私の顔を見据えた。

「あなたに話なんかしてもどうなる物でもないよ。畜生、あたしはどうかしてたんだ。見ず知らずの男におかしな話をして……」

たしかに私にはどうするあてがあるわけでもなかったが、沼で見た赤い衣の女のことにはどうにも気になってしかたなかった。恐ろしい美しさとナーザの言葉どうり毒を含んだ何かがあんな女にはあつた。私は秘密を知りたかつた。

「僕は見ただ。村の近くの沼で赤い衣の女が水にはいつているところを」

ナーザの涙に濡れた目が光り、信じられないというように唇が開いた。

「……そう、あんた見たんだ。あいつを……」

私は沼で見た一部始終を彼女に話した。

「そうかい、やつぱりあの沼に……」

ナーザがそこまで話しかけたとき、酒場の中にどよめきが起こつた。扉が開き誰かがはいつて来たのだ。私もナーザも戸口の方を見た。

真紅の服が目飛び込んできた。あの女に間違いなかつた。沼で妖しい白い背中を見せたあの女だつた。

男たちの視線の海の中を彼女は身をくねらせて歩み、店の中央の卓に陣取つた。

「ガーズ」

女は酒を注文した。ふればぐずぐずととろけてしまいそうな真つ赤な唇が半ば開き、すぼめられ、また閉じられた。目に見えない何かがそこから滴り落ち、まわりの空気を赤く染めたように思えた。

村中の男が夢中になるのは何の不思議もないことに思えた。いや、この女がサンジェリイに現われれば、都中の男が彼女の尻を追いかけて回すだろう。

濃い栗色の波打つ髪。白い逆三角形の顎の細い顔。猫を思わせる大きな鳶色の瞳からは強い光が放たれていた。

美しさと共にそこには強靱な何かの力があるように思えた。強烈な美しさへの自信なのだろうか、彼女は王女のように振舞い、男た

ちはそれを当然のものとして受け入れていたようだつた。

リンシヤムはまわりを取り囲んでいた男たちとしばらく会話を交していた。それは会話というよりアニヤチの皇帝の謁見のようなものだつた。男たちがあれこれと彼女の美しさをたたえ、自分の方を振り向かせようとしてもほとんど彼女は唇を動かさず、わずかにうなずいたり、唇の端をかすかに曲げて笑みを返すだけだつた。ごくまれに一言二言言葉を返したが私はその言葉を理解出来なかつた。彼女はウォモレン（共通語）で話してはいたが、彼女の唇が開き、声が発せられる時、その言葉には意味が消失した。彼女の甘く低い声はそれ自体が媚薬と言つて過言ではなかつた。言葉には意味がないのだ。

私の視線は知らずの内にリンシヤムに釘付けにされていた。彼女のまわりの全ての物はぼやけ、形を失い灰色のもやと化していった。ただ、真紅の衣をまとつた栗色の髪の女が世界には存在していた。それ以外の物は全て無意味だつた。

リンシヤムの視線が私の方に向いた。鳶色の瞳が私を見ていた。動かない唇の向こうから耳には聞こえぬ言葉がやって来る……おまえは見たね……おまえは……

私の股間の物は痛いほど固くなつていた。私はふらふらと立ち上がり、彼女の方へ足を踏み出そうとした。

そのとき何か私を突き飛ばした。私は椅子に足をぶつけて、床に転がった。壁に頭をぶつけて、痛みが世界を伴つてやって来た。

「この、化け物女！死ね！」

ナーザが手に光る物を持って飛び出して行く。呆気に取られている男たちをかき分けてリンシヤムに近づく。私の目には全てがひどくゆっくりとした動きで映っていた。

卓上の酒杯がふつ飛び床に落ちて砕けた。白い酒が飛び散る。

ナーザの短剣を握つた右手が大きく振り上げられた。彼女の横顔は鬼のように見えた。

刃がリンシヤムの顔に近付いて行く。だが彼女の美しい顔にはか

すかな笑みが浮かんでいる。衣の袖がはためき魔法のように白い手が現われてナーザの右手をつかんだ。

一瞬リンシヤムの顔が歪んだかに見えた。何かわけのわからない物がそこに現われたような気がした。

次の瞬間にはナーザの右手から短剣が落ち、彼女はリンシヤムの手に捕えられていた。

「畜生！はなせ！おまえは怪物だ！」

そこで夢から覚めたように周囲のどよめきが耳に飛び込んで来た。男たちは怒りに顔を引きつらせ、ナーザに飛びかかろうとしている。女帝に刀を向けた大罪人を処刑しようとしている。ひとりの男が腰から山刀を抜こうとしていた。

私は山刀の男を殴り倒し、次の四十がらみの男の腹を思い切り蹴り上げた。倒れる彼を飛び越え次の相手の鼻面に拳を叩き込み、ナーザの腕を引つつかんだ。

あつさりとリンシヤムは手をはなした。再び目があった。半眼に開いた瞳は笑っていた。こんな状況でも私は彼女を押し倒したい欲望にかられた。

だが今は理性が勝った。ナーザの腰を抱えると一直線に出口を指した。外に出ると全力で駆け出した。

もちろん、ゴープの村にはサンジェリイのようにデリン灯などという物はない。月も雲に覆われていた。外は真つ暗だった。罵声を上げるナーザを引つ張りながら、通りを抜け出すのは一苦労だった。昼間の記憶と所々にある松明の明りを辿って村を抜け、森の入り口まで逃げた。

黒い夜空よりも更に高くそびえる古木の根元で私たちは息を整えた。追手は来る気配がない。

「何で邪魔するんだ。あの化け物は殺さなくちゃならないんだ。あいつは魔女なんだ。あたしのペンドを奪った。木偶の棒にしちまつた！畜生、殺してやる！」

真つ暗でナーザの顔は見えなかったがその方がよかった。

「君の恋人もあいつにいかれちゃったってわけか」

「そうさ、三日ばかり姿が見えなくて、帰って来たと思つたらもうペンドじゃないんだ。あの魔女に魂を抜き取られてる。あたしの顔も名前もちゃんと覚えてるさ。でも気持ちは覚えてないんだ。畜生！だからあいつを殺してやるんだ！」

彼女の肩に手をやると熱く震えていた。私は手に少しだけ力を込めた。

「あの女が何者か知ってるのか」

ナーザはしゃくり上げながら答えた。

「デウムって女がいたんだ。森にひとり住んで、時々葉草なんかを村に売りに来てた。すごく醜い女だったんだ。歳はあたしと同じ位だつて話なんたけど、髪は婆様のような灰色でいつも強ばつてぼうぼうだった。顔には薄茶色の染みついていうか、斑みみたいなのが散らばつて、変にしわがあるんだ。目と目の間が蛙か何かみたいに離れてて、まぶたなんか垂れ下がってる。鼻がひどく曲がつてる上に口も間違つてつけた裂け目みたいに大きくて、そこから黄色くて尖った歯が出鱈目にはみ出してる。ほんとの化け物みたいな奴だったんだよ」

「デウムは魔女だったのかい」

「そういう噂もあつたよ。でも悪さをするわけじゃないし、葉草は役にたつてたからね……」

「デウムがリンシヤムになつたとなぜわかる」

ナーザは震える手で私の腕をつかみごとくりと喉を鳴らした。何か吐き出したのを我慢でもしているかのようにだった。

「あんた、ランケンとかいったね、見たんだろ！あの沼で……：：：ならあたしの話も信じてくれるよね。村の連中は誰も信用しちゃうれないのさ。あたしは確かに見たんだよ、本当なんだ。あの沼で……：：：」

そこまで言うとなーザは咳こんで、喉を押えた。走つたりしたせいでだいたい酔いがまわつてしまったようだった。

「何を見たんだ」

「森に山菜摘みにはいつていつの間にあの沼に出ちまったんだ。昔からあの沼にはいつちやいけないって爺様たちが言ってる。何かに住みついてるってね。村人は誰も寄り付かない沼さ。」

「あたしも初めて来たんだ。とてもきれいなところでさ、何かがいるなんて信じられなかったからしばらく景色を見てたさ。そしたらデウムがいたんだ。素っ裸で向こう岸に立ってた。あいつが醜いのは顔だけじゃないんだ。あんたも一度見たら死ぬまで忘れられないさ。背中には大きなこぶが盛り上がっていて、体中に茶色の斑がついてて、じくじくした吹き出物みたいなのが幾つも幾つもあるんだ。おなかや尻のあたりには肉が幾重にも垂れ下がっててね、足も手も左右で長さが違うんだ。あたしは離れた岸の草むらから見てたんだけど、気持ちが悪くなつて吐きそうになつた位さ。」

「最初は水浴びでもするのかなくて思ってた。でも追うのさ。何だか岸辺で焚き火を始めたんだ。兎や蛇の死骸を燃やしてた。青白い煙がこつちまで漂ってきて、その臭いときたら、あたしはとうとう我慢出来ずにそこに吐いちゃったよ。ただ、肉を焼いてるのは違うひどい臭いなんだ。」

「それからデウムは何かぶつぶつ独り言を言い出したんだ。その頃にはあたしも、これは何かいけない魔術の儀式なんだって思ったけど、不思議と逃げ出す気にはならなかった。最後まで何が起きるか見ていたくなつたんだ。」

「デウムはずつと呪文みたいなのを唱えてた。それが終わると焚き火の燃えかすに手を突っ込んで灰と燃え殻を沼にまいたんだ。ほかにも何かを沼に放り込んだ。何だったかよく見えなかったけど、生き物の足か手みたいにも見える肉色の物だったんだよ。それからまた呪文が始まったけど、今度のは短くて大きな声で叫んでた。すごく強い男みたいな声だった。あたしは恐ろしくなつてきて、逃げようとしたんだけど、なぜか体が言うことを聞かないんだ。その場に座りこんじまって目はデウムの醜い姿に釘付けさ。」

「デウムはゆっくりと沼の中にはいつていつた。あいつが沼にはいつて行くとおかしなことが起こつたんだ」

ナーザは言葉を切った。

「ねえ、あたしの言うこと信じてるだろう」

「ああ、信じてるとも」

彼女は溜め息をつき、座り直すと話を続けた。

「デウムが一步一步沼にはいつて行くにつれて何だか頭がしびれるような変な気分になって行くんだ。だんだんと気が遠くなつて行くって言うか、まわりがもやもやした霧がかかったように見えてきて頭の後ろの方がすうつと冷たくなつて行くのさ。それでも目はデウムのことを見ていた。空が紫色に見えてきて、森は空色になつたみたいに見えた。デウムは頭のでっぺんまで沼に沈んで見えなくなつちまった。あたしももう頭がぼうつとしてそのまま気を失つちまったんだ。でも……」

ナーザは再び言葉をつまらせた。

「でも？」

「よくは覚えてないし、頭がくらくらしてたから自分でも自信はないよ。でも、デウムが沼の中に姿を消そうとするとき、何か沼の中から出て来て、デウムに巻き付いたように見えた。何だか、大きな蛭みたいな灰色の蛇みたいにも見えるものがちらつと見えた。沼の中から出て来たんだ！」

「気がつくよね、あの女が岸辺に立ってた。リンシヤムが素っ裸でいたんだ。女のあたしでもきれいだつて思った。水に濡れて真っ白い肌が震えてるみたいだった。あんなきれいな女はほんとに見たことないさ。でも、あいつはデウムなんだよ。ほかに考えられないじゃないか。」

「リンシヤムは森の中へ歩いて行つたわ。あたしは村に辿り着いてしばらくは黙つてた。こんな話誰も信じちゃくれないかと思つたからね。でも、村にリンシヤムが現われて、男どもがおかしくなり始めると黙つちやいられなかった。リンシヤムは何かいけない魔術で

産まれた怪物なんだ。でも誰も信じてはくれない。女たちだつてリンシヤムには頭にきてるけどあたしの話はとりあつてくれない。畜生！そんなことしている内にあたしのペンドまであいつの虜になつちまつた。畜生！」

ナーザは再び涙を流した。私は彼女の肩を抱いて、黙っているほかなかつた。

ナーザの話は嘘ではないだろうが、それだけでデウムなる女がリンシヤムに化けたとは確信は出来なかつた。あるいは神隠しの件についても恋人を奪われたナーザの妄想のようにも思えた。雄かにリンシヤムには何か尋常ならざるものがあるとは私も確信していたが、ナーザにしてもまるきりまともな状態というわけではない。

「リンシヤムの家というのはこのあたりにあるのかい」

「ああ、そうだよ。あたしは一度行ったことがあるんだ。何かあいつか化け物だつて証がたてられるかと思つてね。一晚、見張つてた。でも何にも起こらなかつた。でも、恐かつたんだ。すごく恐かつたよ。目に見えない何かがあるんだ。なんて言うか寒くもないのに冷たいんだ。何か冷たいものがあるんだ」

ナーザの話は今ひとつ意味がつかめなかつたが、特別な気配があるということなのだろうか。

「そこに案内出来るかい」

ナーザは少しの間黙つていた。

「ああ、出来る」

「なら、行つてみよう。何かがつかめるかもしれない」

私の言葉は本心を素直に伝えてはいなかつた。私が一番に求めていたのはリンシヤムの秘密よりも、ナーザを助けることよりも、ただリンシヤムの姿を見たいということだつた。既に沼での一件や酒場での事件、そしてナーザの話でリンシヤムという女に怪しい影を見ているにもかかわらず、私の心の一番深い部分はリンシヤムを追い求めて吠え声をあげていた。リンシヤムの美しさは知性や理性に訴えかけるものではなかつた。退廃でもなく野性でもなかつた。

もつとも根源的な欲望に直接刺激を与える代物だつた。誰もリンシヤムと共に暮らし子どもを作り生活することなど考えはしないだろう。生きる営みを無視して、彼女は美しいのだった。

私たちは暗い村はずれの道を歩いた。遠くに見える村の明りと雲間から顔を出し始めた月が頼りだつた。一度森を出て、再びはいつた。少し歩いたところで狭い広場のように木がはらわれた所に出た。一軒の小さな家がたつていた。特別変わったつくりではなく丸太と板を組んでつくられた質素な家だ。明りは見えない。

「いないようだな。中は見たことあるのか」

「ないよ。この前来たときは木の影に隠れて見てた」

私たちは息をひそめ、家の主の帰館を待った。雲が速い動きで散り散りになつて行き、まるい月が黄色っぽい横顔を見せ始めた。黒い影絵のようだつたあたりが陰影のある風景画となつていく。

かさこそと下草を踏む音がした。私の肩をつかんでいたナーザの手に力はいつた。

森の中からリンシヤムらしき人影が現われた。ひとりではない。男をひとり連れていた。二人は、ふらふらとした足取りで家の方へ向かつていく。酔つているようだつたが、リンシヤムは確実に男を導いていた。

二人は家の中へ入つた。窓に明りがさした。私たちは木の影から出て、家の横手の窓の下に忍んで行つた。

転がつていた丸太の上に立つと窓の中をのぞくことができた。質素な部屋で壁際の棚に瓶が幾つも並んでいる。梁からは萎びた草や木の枝、蝙蝠か何かの木乃伊らしき物などがたくさんぶら下がつていた。床には動物の毛皮が敷いてある。熊のようにも見えたがどことなく違うような気もした。

天井から下がっている洋灯は凝つた打ち出し模様のついた銀製の代物でこの家の中で唯一ぜいたくな品と言える物だつた。そこから発せられる光は時折緑や紫の不思議な色合いを帯びて揺らめいた。

家の中にはリンシヤムと男がいた。男は先刻酒場で私が殴り倒し



た男のひとりだった。若く痩せている。黒い縮れた髪の下顔付きは生真面目と言つてよかつた。

「知つてるか、あの男」

私は声を押し殺してナーザにたずねた。

「鍛冶屋の息子のトスラ。このごろリンシヤムに気に入られてるつて噂だつたけど」

二人は銀の洋灯の下で抱き合つていた。リンシヤムの腕が白蛇のようにトスラの首に巻き付き、トスラの腕はぎごちなくリンシヤムの背を撫でている。二人の唇が触れ合つた。私は窓を打ち破つて中へ飛び込んで行きたい気分になつてきた。

リンシヤムの唇は血で染まつているかのよう赤く光つて見えた。重なつた唇の合間から二人の絡み合つた舌がちらちらと垣間見えた。リンシヤムの白い喉をよだれが流れ落ちていった。

二人は毛皮の上に倒れ込み、着ている物をもどかしく取り去つた。リンシヤムの裸身は私の目を焼いた。いつの間にか窓枠を握つた手が震えていた。

リンシヤムとトスラは狂つたように激しい行為を始めた。リンシヤムの爪が男の背中に幾筋もの赤い痕を残して行く。トスラの尻は大地をはらませるかの力で上下していた。

髪を振り乱したリンシヤムの顔がトスラの頭の下から見えた。目を閉じ忘我の境地にいる彼女を見てると私の狂おしい衝動は押え切れないものとなつて行く。

「ランケン、ランケン」

ナーザに名を呼ばれ肩を揺さ振られて、私は我に返つた。いつの間にか私は腰の剣を半ば抜いていた。

窓の向こうの二人は気違い染みた情熱で互いの体をむさぼり合つていた。汗で肌が光っている。

リンシヤムのあえぎ声があつと止まつた。眉間に深いしわを寄せ、手足を強ばらせている。トスラの尻がびくびくと動いたが、すぐにくぐつたりとして動かなくなつた。リンシヤムの爪先だけが快樂

の余韻に引きつたような動きを時折繰り返していた。急に二人の生臭い体臭が流れて来たような気がした。

二人はつながつたまましばらくそうしていた。

しかし、事は終わりではなかつた。これから始まりだつたのだ。

毛皮の上に投げ出されていた白い腕がするするとトスラの背中にまわされた。笑みを浮かべたリンシヤムはトスラに頬ずりする。トスラはまだ行為の疲れから抜け出せないよう体で力がはいつていなくなつた。

トスラのものらしきうめき声が聞こえてきた。それは肉の喜びから来るものではなく苦痛と恐怖のうめきだつた。トスラの尻の当たりの肉がうねるように動いていた。明りの加減かと思つたがどうやら違うようだつた。トスラははつきりと意識を取り戻して、両腕を床に突つ張り体をリンシヤムから引き離そうとしたが腰の一点で彼の体はしつかりとリンシヤムにくつついていた。

トスラの声は恐ろしい絶叫に変わった。彼の尻の肉が何個所もで裂け赤いものが噴き出した。誰も彼の尻を鞭打つてはいない。内側からの力が肉を弾けさせているのだ。

トスラの尻は破裂しているわけではなかつた。内側に収縮して行くのだ。彼の体はリンシヤムの中へ吸い込まれようとしているのだ。

背中や足の肉もまた異常な力でよじれ、波打つていた。肌に桃色のみみず腫れが幾筋も走りそこから玉となつて血が噴き出して行く。必死になつてトスラはもがいたがリンシヤムから離れる事は出来なかつた。

リンシヤムの美しい顔は陶酔の笑みを浮かべていた。これからが彼女にとって本当の交わりなのだろう。つい今までの恍惚の表情よりもどこかゆとりのある本当に心地好そうな顔付きだつた。無邪気な喜びに満ちていると言つても良い表情だつた。

血飛沫が上がり、トスラの腰のあたりは形のない肉の固まりと化した。肉の合間から白い骨が見えたがそれも泥の山が崩れるように

縮んで行きリンシヤムの股間へと入って行く。背中と足の桃色の筋はいまや大きな肉の裂け目となり、鮮血をほとぼしらせている。だからと流れ落ちる血はリンシヤムの白い乳房を、腹を、真つ赤に染めて行く。リンシヤムの腕は血みどろになったトスラの胸を優しく撫でまわし、傷口をまさぐった。

トスラの腰はほとんど姿を消し、背中と太股が今度は吸い込まれて行った。ぶしゅつと音がして、はらわたが飛び出した。ぬめぬめと光る腸が生きた蛇のようにリンシヤムの胸の上をのたくった。彼女はそれをつかむと頬ずりし、長い舌でなめ回した。腸のひだの間に真つ赤な舌を差し込んで血と体液をなめ取り、すすった。

大きく広げられた両足の間、リンシヤムの女陰は飽くことなく肉と血と骨の混じりあつた固まりを吸い込んで行った。別の生き物のようにそれはうごめき、左右の唇を震わせ、たらたらと透明な蜜をしたたらせながらおぞましい物をむさぼり食う。

白い背骨が露出してそれに引きずられるようにトスラの胸から上の部分がリンシヤムの股ぐらに動いて行った。トスラは胸の下にすねがくつついた滑稽な姿になった。両腕はだらんとリンシヤムの胸の上ののぼされ、彼女の肩のあたりに引つかかっていた。リンシヤムは男の指をくわえて、かじってみたり、なめてみたり弄んだ。その間にもトスラの体は血を噴きながら見えない力で押し潰されるように縮んで行く。

肋の間から胸と背の肉と皮が落ち込み背骨に巻き付く。飛び出した肋骨は一本一本、音をたてて折れて細かい骨片となり血の海の中を流れていく。まだ脈打っている心の臓は最後の抵抗を試みるかの様にほとんど縮まずにそのままの姿で女陰を大きく広げて中に吸い込まれていった。

肩が、腕が、足が体内に消えていき、もはやトスラの体で残っているのは頭を残すのみとなった。首の下から尻尾のようにはえた背骨がずると中にはいっていき、頭が腹の上から股間に落ちた。トスラの顔がこちらを向いた。見開いた目は驚愕と不可解な疑問を

張り何かさせたまま冷たい光を放っていた。開いた口元には絶望の表情があつた。

首の方からトスラの頭はリンシヤムの股間に吸い込まれていく。顎の骨が砕けて、顔の下半分が潰れた。口だった赤い穴から白い物がぼろぼろとこぼれる。支える物を失った歯が落ちていくのだ。

頭の上半分が残った。リンシヤムは快楽の最後の波を楽しもうとするかのようにしばし、股に頭を挟んで身をくねらせていたが、やがてトスラの縮れた髪がごそつと抜け落ちた。目玉がひとつ飛び出し、床に転がった。少しの間をおいてもう一方も飛び出した。頭蓋骨が内側からの力に陥没したのだ。トスラの頭は形を失くし握り拳ほどの赤と黒と肌色の混じり合った固まりになった。そして粘着質の音をたてながら、女の中へと姿を消した。

男のすべてを飲み込んだリンシヤムは満足気な笑みを浮かべて、血でぐつしよりになった毛皮の上に寝そべっていた。白い肌は血まみれでほとんど見えない。手探りで床に転がったトスラの眼球を捜し当てるとそれを口に運んだ。長く先の尖った舌でなめ回し、口に含んでは出してみる。もう片方の手は今の快感の余韻を懐かしむように股間を愛撫し、蛙のように脹れた下腹を撫で回した。

指ではさんで目玉を潰し、卵を飲むようにそれをすすった。

私とナーザは石に変えられた人間のように窓際で動くことが出来ずにいた。目の前で起こったことはほとんど理解を越えることだった。私は放浪の旅の途中で幾度も妖魔と遭遇し、奇怪な事件にまきこまれてきたが、この情景は耐え難い物だった。私はトスラが悲鳴をあげた時点で中に飛び込み彼を助けるべきだったが、それが出来なかつた。恐怖ではなく驚愕が私の動きを封じた。

ナーザは痴呆のように口を開いたまままで私の肩にしがみついていた。リンシヤムに対する憎しみや怒り、恋人を奪われた悲しみはどこかに行ってしまったのではないかとおもわれた。

「……行こうよ……はやく……」

ナーザはかすれる声でささやいた。

だが私は今ひとつの恐怖と対面していた。この棲まじい光景を見ても今だに私はリンシヤムを求めていた。血みどろになりはらんだ女のように腹を膨らませて横たわるリンシヤムはそれでも美しく見えた。異常な出来ごとと自分自信の異常とも思える欲望に私の頭は混乱していた。

ナーザが私の袖を引つ張った。私は彼女に引きずられるように森の方へと歩いた。

私にはナーザが言っていた冷たい気配というものはわからなかった。リンシヤムの呪縛に捕われているからなのだろうか、ここで感じるものは暖かい死、生ぬるい湿った死の匂いだった。地獄の火のぬくもりなのだろうか。

私たちが森の中へはいると同時に、家の扉が開きしんだ音がした。月光の中にリンシヤムがいる。全身に浴びた血を拭いてもせずに一糸もまとわぬ姿のまま、沼の方へ続く森の小道を歩いていった。

「行ってみよう」

「駄目だよ、ランケン。あいつは本当の怪物だ。あたしは恐いよ。もう逃げよう、村を出よう。とてもじゃないけど……」

ナーザの酒はすっかり抜けてしまったようだった。

「ペンドのことはもういいのさ」

ナーザは一瞬言葉に詰まった。だが、彼女は私の言葉の嘘を見抜いていた。

「あんたもあいつにつかまっちゃったんだ。あいつが抱きたいんだろう。あの化け物女が！」

私はペンドのことを持ち出した自分のずるさに嫌気がさした。私はリンシヤムの後をつけてどうするつもりなのだろうか。何も方策はなかった。いきなり斬りつけてしまうのが一番良いことのような気もしたが、そうやすやすと倒されるような相手とも思えなかったし、それは今出来そうになかった。ナーザがわめいた「殺してやる」という言葉は正しい。リンシヤムは文字通り男を食らう怪物なのだから、退治しなければならぬはずだった。

「もう逃げよう！村に帰ってもどうせ誰も信じちゃくれないうし、ペンドのことほ死ぬほど悔しいけど、あいつに食い殺されるよりはまし。あんたもトスラと同じ目にあいたいのかい」

ナーザの言うことは全く正しかった。リンシヤムを殺すにしても、何か方策を考えるのが正解だろう。けれども私はリンシヤムの後を追って行きたかった。

「僕はもう少し様子をみる。君はここで待っているんだ。このあたりには獣は余り出まい。夜が明けたら街道を下ろう」

「ランケン！」

私はナーザをおいてリンシヤムの後を追った。彼女は沼に行つたに違いない。木々の間から射してくる月明りでかろうじて道がわかった。足許にぬるつとした感触の物がある。彼女の体から流れ落ちた血なのだろうか。それにしても量が多いような気もした。甘い女の匂いとべつの何かの臭いがする。酔っぱいような血の臭いと混じり合った奇妙な臭いだ。

ほどなく沼が木立の間に見えてきた。月明りが白く映っている。いや、沼自体が光を発しているのだ。

私の正面にリンシヤムが立っている。沼からの白い光の中に美しい輪郭が浮かんでいる。

私はそのまま駆け寄って抱きつきたい欲望をかううじて押え、木々の後ろに隠れて、横手に回った。

沼はその水面自体が光っているようでも何も見えない。波はななく凍りついたようにも見えた。

白い光を浴びたリンシヤムの血染めの裸身はぞつとするほど美しかった。彼女は両腕を天にかざし、首を垂れて、何事がつぶやいた。ナーザの言っていた呪文なのだろう。

「シュブ、エツト、ロマット、ナイジブナイジベ、ニジエ、ベツト……」

短い音節を繰り返す呪文はロラストの山々の奥地で使われているという古口ローク語に似ているようにも聞こえたが、理解すること

は出来なかつた。

沼に異変が起こつた。中央部の水面がごぼごぼと泡立つたかと思うとそこから何かが現われた。それはナーザの言っていた蛭か蛇のような物とも思えたし、また沼の水自体が生を受け形を成しているようにも思えた。

それは人の足ほどの太さのある触腕状の物で、鈍い銀色に光っている。目鼻らしき物はなかつたが先端に近い部分にくびれがありそこで一段太くなつてゐるのが亀の頭のようにも見えた。

それはするすると長さを増し沼の上でくねくねと動いていたが、リンシヤムの立つ岸の方へと頭を向けた。

リンシヤムは呪文を止め、沼に背を向けた。その場に四つん這いになり沼に向けて尻を突き出し足を開いた。

沼からのものはリンシヤムの豊かな尻に巻き付き、その頭の部分は股間をまさぐつた。リンシヤムは荒い息を吐き、体をよじる。乳房が揺れるのが見えた。

沼のものはリンシヤムの股間へ頭を埋めた。それはずぶずぶと信じられないくらい中へ入つていった。二イート（約六十センチ）ほども彼女の体内に入つてしまつたようだった。

沼と女の奇怪な情交が始まつた。リンシヤムは尻を振り立て、腹の奥からしぼり出すような声を上げた。沼の男根は彼女の体を締めつけ、掻き回した。リンシヤムの股間からはぼたぼたと何かが滴り落ちていたが血なのか別の何かなのかはわからない。じゅるじゅるという音がここまで届いた。

一物がずきずきと痛んだ。今にもそれは破裂してしまふのではないかと思われた。木のうろにでも突つ込んでやりたくなつた。かううじて眼前の光景の異常さがそれを押えていた。だがこの欲情の源はその異常な光景なのだった。

沼のものが一きわ深くリンシヤムの体に突き刺さつた。リンシヤムは獣じみた声を上げ、地面に突つ伏した。沼から出た白い稲妻状の光が触腕を伝つて彼女の体にとどき、全身を這いずり回つた。

音を立てて、沼のものが彼女の体内から出てきた。抜けるとき、一緒に半液状のどろりとした物が飛び散つた。沼のものはそのまま水中に姿を消した。

だが、リンシヤムの声は治まらなかつた。犬のような姿勢のまま、彼女は身悶えし、肩で息をしながらあえぎ声を上げ続けた。淫らな喜びと苦痛の叫びがない混ぜになつたような声が森にこだました。

リンシヤムは頭を地面にすりつけ、尻を震わせた。悶える声が一きわ高くなつた。

女の尻から何かが噴き出した。物が破裂したような音と共にどろどろした半ば水のような、半ば固まりでもある物が噴き出した。

沼はまだ白い光を発しており、その噴き出した物を照らし出した。まるで大便を漏らしてでもいるかのようだったがそれは汚物ではなかつた。赤味がかつた肉色の得体の知れない物。岸辺に落ちたそれは沼の中へゆつくりと流れ、沼の水に触れると白い湯気を出した。異臭が裸つてくる。甘つたるい吐き気を催す悪臭だった。

リンシヤムの尻の穴は信じ難いほど大きく開き、肉色の物を吐き出し続けた。赤くただれたような穴は磯巾着のように開き、粘つく液体を滴らせている。

リンシヤムの体全体がびくびくとうごめき、赤子の頭ほどもある大きな固まりを産み落とした。そのままリンシヤムは地べたに突つ伏し、ごろりと転がつた。

彼女の股間に山のように盛りあがつた肉色の物はぬめぬめと光り、大量の嘔吐した物のように見えた。それは沼の中へと入つていったがただ流れているのか、あるいは自分の意志で動いて行くようにも思えた。

固まりが全て沼の中に入つてしまうと白い煙も止まり、しばし静寂が訪れた。リンシヤムは岸辺に横たわつたまま、浅い息の音が聞こえてくる。彼女の腹は脹らみを失い元通りになつていった。

私は股間に生暖かい物を感じていた。いつにの間にか射撃してし

まっていた。体の力が抜け、その場に座り込んだ。情ない気分だったが恐ろしいことにまだ欲望は去らなかつた。力なく倒れているリンシヤムに近づき抱き締めたかつた。

水音がした。リンシヤムが噴出した肉色の物は水面から顔を出していたがそれが動いていた。見えない手が粘土をこねて塑像を造っていくようだった。沼に浸ったそれはふるふると動きながら形を成していく。細い塔状に立ち上がったかと思うと、あちこちが脹らみ出し、見慣れた形になっていく。

頂部が脹らみ頭となった。肩が、胸が造られ、草の根がのびるように両腕がはえた。頭には細かいでこぼこが出来目鼻となつていく。果実から虫が出てくるように黒い髪がはえた。

そこに立っているのはトスラだった。縮れた髪も痩せた体も神経質そうな顔もつい先刻リンシヤムの股間に消えたトスラそのままだった。

神隠しの秘密は暴かれた。人が変わるどころではなかつた。別の物になってしまふのだから。

トスラの姿をした物は沼に腰までつかつて突っ立っていた。リンシヤムが手まねきした。トスラは沼からあがり彼女の前まで行つた。リンシヤムは立ち上がり、身代わりの物に口付けした。すると、今まで死人のように硬直していたトスラの体に急に人間らしい柔らかい動きが出てきたように見えた。

リンシヤムは何事かトスラにささやくと沼の中へ入っていった。彼女は沼に潜り出て来なかつた。まともな人間なら十回ほども溺死する時間、彼女は潜つたぎりだった。

水面の光が薄くなり消えた。静かに水を割り、リンシヤムが浮かびあがつた。体中の血はきれいに落ちて、その月明りに照らされた肌はいつそう白く美しくなつたように思えた。

リンシヤムはトスラの身代わりを連れて森の道を帰って行つた。私は後を追つた。

木々の影と月光がリンシヤムの体に流れ動く斑模様をつくつてい

る。月に照らされた青みを帯びた白い肌、影に隠された濃い青灰色の肌。裸足の足が下草と小枝を踏み付ける軽い音が聞こえる。夜の森を歩く天の使い。彼女の仕える天界には誰がいるのか。

トスラの身代わりの物はリンシヤムの後をついて行く。一步一步歩く度にその歩き方はより人間らしく、体全体の動きも滑らかになつていくようだった。

森の中の家が見えてきた。リンシヤムは家の前で立ち止まりこちらを向いた。身代わりはそのまま家の中へ入つた。

青白い裸身が私を招いていた。

足がひとりでに動き私は進んで行く。月の明りは信じられないほど強い。あたりは黄昏どきほどの明るさになっている。青緑の夕暮れ、あるいは夜明けだろうか。

リンシヤムは何も言わなかつたがその声は確かに届いていた。私も言葉は発しなかつたが私の体内の何かが彼女に答えていた。

彼女はすぐそこにいる。手をのばせばその豊かな乳房に触れることが出来る。真つ赤な唇に触れることが出来る。縮れ毛に覆われた秘唇にも触れることが出来る。

美しいリンシヤムはすぐそこにいる。赤と橙、桃色の粘土をこねあわせて造られた塑像に真つ白な絵の具を幾重にも塗り重ねたように彼女は見える。見つめてみるとその肌の白さはどんだんまして行き、まぶしいほどになつていく。目の縁に下地の赤と橙が覗いている。細い朱の縁取りがぬらぬらと光っているのが見える。青みを帯びた白眼と髪と同じ栗色の瞳もまた濡れている。瞳のまん中は黒い。その部分が彼女の動きに合わせてように大きくなり小さくなる。長いまつ毛がひくひくと震えている。

唇が赤い。白い布に真つ赤な血を垂らしたようだ。唇のしわが見える。しわに沿つて光が粒のように見える。ゆっくりと唇が開き桃色の舌が顔を出した。蛇のようにくねくねと動く光る欲情の固まり。

耳には聞こえない声が響く。全身にその声は響く。柔らかい心地

好い振動が体中に伝わってくる。私を招いている。極彩色の花々で覆われた天界への誘いだ。森はない。家もない。空は目の覚めるような鮮やかな紫色になった。すじ雲がものすごい速さで流れ、渦巻いている。地平線近くは黄色みを帯びた光を発している。地上は定かな形を持たず、絶えず、うねうねと波打つ。柔らかい桃色の毛布の上に造られた世界のような。咲き乱れる花々は躁病の画家が絵の具を塗りたいくったようだ。赤、黄色、緑、紫、青、群青、黄緑、橙、紅、水色、数え切れない色の花々は大小の花びらを開き蜜を滴らせている。強い香りがする。甘い、甘い、脳味噌がとろけるような香りだ。花の香りが全身を包み、体がぐずぐずとろけていく。足は体を支えることを放棄して、私は桃色の地面にくずおれる。紫と黄色の空が視界を横切り、人の肌のような大地が迫ってくる。倒れても痛みはない。心地好い暖かみと柔らかさ。花が私の上に覆い被さってくる。私は何も身に着けていない。股間の物は反りかえり、汗が吹き出す。花々が体中を這い回り、愛撫する。それは次第に形を失くし解け合い、七色のどろどろの流動物となり私の体を包み込む。体中の穴という穴からそれは体内に侵入し、私の体の内と外の境界をなくした。内も外も全てがその暖かい物で満たされている。心地好いしびれたような感覚が広がり、意識が薄れていく。自分の体の感覚がなくなっていくのがわかる。体はない。意識もやがてなくなる。……何もないことこそ最高の状態に違いない。全て無だ。何も無い。極限の安息だ……

どこかで誰かが呼ぶ声がする。誰かが私の名を呼んでいる。それは私の名のような気もするが遠い異国の知らない言葉のように聞こえる。ランケン、ランケン、ランケン。…私の名前だ。誰かが呼んでいる。空が裂ける。紫と黄色の空が垂れ幕のように波打ち裂けて、真っ黒い夜空が現われた。まるい月の光が目にも痛いほどだ。私の上に誰かが乗っている。私の上に股が激しく体をゆさぶりあえぎ声をあげている。私もその一部だ。私も同じようにうごめいている。一点でつながった二匹の虫。どろどろと青緑の腐った体液を滴

らせて潰れていく虫けら。

リンシヤムの姿が歪んで見える。月を背にしているので顔は見えないがリンシヤムではないようにも見える。栗色の長い髪が揺れる度に灰色の斑のような物が見える。重い乳房が揺れる度に何か飛び散る。それは私の顔にも降りかかってくる。腐った肉汁のような臭いがする。どろどろとした膿。ヴェーラ（ヴァイオリンのような弦楽器）のような美しい体の線が突然不自然な凹凸をつくり崩れるように見える。次の瞬間にはまた元の美しい線に戻るが、激しい息の合間合間から崩れた人間の残骸のような物が見える。

「ランケン！」

私の肉の耳に声が届いた。ナーザの脅えた声だ。恐怖と苛立ちの詰まった叫ぶ声が聞こえた。

ものすごい恐怖が襲って来た。トスラの首がリンシヤムの股間に吸い込まれていく様子が目のまえで爆発した。私は身をよじりリンシヤムを突き放した。ずぼりという音を立てて私の男根が彼女の体内から抜け出した。リンシヤムの股間から蜜が滴る。

腰に手をやったが私は裸だった。剣がない。

「ランケン、ここだ」

後ろでナーザの声がした。私の剣を投げてよこす。

リンシヤムは地面の上に膝を流して座り、笑みを浮かべながらこちらを見ている。冷たい汗がひいていくのを感じた。急にナーザが憎くなった。あの天界から私を引き戻した彼女が憎かった。

「ランケン！そいつを殺さなくて！化け物だよ、そいつは！」

そうだ。こいつを殺さなくてはならない。これは怪物だ。自分の目で見たではないか。リンシヤムは化け物だ。殺さなくてはならない。

リンシヤムは立ち上がった。ただ、それだけの動作だが、それでも強烈な煽情的なものがあった。私の意志はとろけた酪のような物だった。

リンシヤムは手を差しのべている。もう一度天国に行こうと白い

柔らかい手をのぼしている。

あたりが暗くなつた。雲が月を覆い隠したのだ。リンシャムの白い姿も闇に包まれた。黒い影になつたリンシャムの輪郭が歪むように見えた。体をつくつてゐる釣り合いその物が崩れて、得体の知れない何かが一瞬そこに出現したような気がした。

その一瞬に私は剣を振り上げた。

「ぎゃつ」という声が出た。

剣が肩から腹までを斬り裂いたとき、それはまた美しいリンシャムに戻つてゐた。私の剣は鈍り、剣先は彼女の肌を裂いただけだった。

雲は去りあたりは再び月明りで満たされた。

リンシャムは血を流して立つてゐる。白い顔にはまだ笑みが浮かんでゐるが、その目には恐ろしい憤怒の表情があつた。凍り付いたように笑みを浮かべたままの口元と大きく見開かれた目が全く不釣り合いで、奇妙な顔を作つてゐた。

傷口は左の肩から乳房を通りへそのあたりまで達してゐた。赤い血が幾筋も幾筋も流れ落ちてゐる。その長い裂け目の下に何かが見えた。萎びた木乃伊の肌のような汚ならしい斑模様のついたものが傷口の中に覗いてゐた。

リンシャムは恐ろしい顔付きで私とナーザをにらんだまま、自分の指で傷口を上から下まで撫で、血まみれになつた指をしゃぶつた。そして、再び笑い家の方を指差した。

私は思わず振り返つた。背後に立つてゐる物があつた。トスラだ。トスラの身代わりの物が立つてゐる。

そいつはばつたのように跳ねると襲ひ掛かつて来た。腕をのぼして私の首を締めつけようとする。力は強い。

私は剣の柄で奴の腹をついた。奴はうめきも何もしなかつた。痛みというものは無いのだろう。

奴はすごい力で私の首を締めつける。蹴つても殴つても全く意にかいさない。

ナーザがわけのわからない叫びをあげて、トスラの首に抱き着いた。頭を押えて後ろに引き倒そうとする。

「はなせ！化け物！」

ナーザはめちやくちやに身代わりの顔を引つ掻いた。血は出ない。傷口からは透明な粘つく液体が滴るだけだった。

私はもう一度渾身の力を込めて、奴の腹を剣の柄でついた。ぽすと音がして、信じ難いことが起こつた。剣の柄頭は奴の腹を突き破つて中へ入つてしまつたのだ。

手応えが異常だった。まるで腹の中は空っぽで何も無いかのようだった。

ともあれ、この衝撃で奴は手をはなした。ナーザを振り払うと姿勢を立て直し向かつてくる。

腹にはぽっかりと拳が入りそうな穴が開いてゐた。蜜のような物が滴つてゐるが、その中には何もないように見えた。

奴は異常な身軽さで跳ねるように突進してくる。だが、今度は私の剣は鈍りはしなかつた。正確に奴の首を斬り落とした。

勢い余つて奴は首のないまま数歩駆けた後、こちらに向き直つた。頭という物はこいつにとつてはそれほど意味のある部分ではないようだった。腕を振り回して再び向かつて来る。ナーザの悲鳴が響いた。

私の剣は奴の胴体を二つに裂いた。上半身と下半身はそれぞれ手足をばたばたさせながら地面の上でのたうつてゐる。私は胃のあたりに痛みを覚えたが、この化け物の解体を続けた。手足を斬り落としても、まだをそれはうごめいてゐたが次第に力を失くしていくようだった。

断面はどこを見ても中空だった。三分の一イート（約十センチ）程の厚さの肉色のじゅくじゅくした物で出来た空っぽの人形だった。リンシャムの尻から出て来たその物は表面は乾いてゐたが、内部はまだ柔らかく泥のようだった。悪臭が立ち込めた。

リンシャムの姿はなかつた。私は散らばつた服を身に着けた。胃

が痛むし、頭痛もしてきた。ばらばらになった化け物の放つ臭いとリンシヤムの残り香が渦巻きひどく気分が悪かった。股間の物はまだリンシヤムのぬくもりを残しているようで妙に暖かく半ば勃起していた。

剣を放り投げるとその場に腰を下ろした。

「ランケン、あいつは逃げたよ。きつと沼に行つたんだ」

「ありがとう。すまなかつたな、森に放り出してしまつて」

「あんた、危ない所だつたんだよ、目付きがおかしかつたもの。あいつの妖術にかかつていたのさ」

ナーザもひどく疲れた様子で座り込んだ。

「沼に行つたのかい。何があつたの」

私は沼で見た光景を思い出した。それはおぞましいものだったが、また魅惑的にも思えた。ナーザに見たことを話した。

「そうか。じゃあ、あのペンドはこれと同じ化け物なんだね」

ナーザは声を出さずに泣いた。先刻のような激しい表情はなかったが、月に照らされた青白い頬をただただ、涙が流れていった。

「ナーザ、あの沼にまつわる話をよく知つている村の者はいないか。きつと何かわかるかもしれない」

ナーザは涙を拭おうともせずに感情のない声で答えた。

「そうだね、ゼカリヤ爺様はそういう昔話にめつぼう詳しかつたけれど……去年死んじまつたから、そう、コラル亭のコアルト爺様ならきつと何か知つてると思う」

何のことはない、あの老人にもつと詳しい話を聞いておけばよかつたのだ。だが、今となつてはあの宿に戻つて主に話を聞くのはかなりの危険を伴うことだつた。

「そうか、僕はこれからコラル亭に行つて爺さんに話を聞いてくることとしよう。一緒に行こう、ここには何かがあるかしれない」

ナーザはうなずいた。

村の入り口には木の柵があり門番がいたがすっかり眠りこけており、脇の小さな扉から簡単にはいることが出来た。まだ真夜中を少

し回つたくらい時刻のはずだつたので、村の通りには人影はなかつた。私たちはコラル亭へと足を速めた。

正面の扉は閉まつていたが、裏の酒場の方に勝手口があり、掛け金を壊すことが出来た。泊まり客はそんなにいないはずだつたが起こさないに越したことはない。コアルト老人の家族は数軒離れた所に家を構えているという話だつた。

台所の方から家に入り、帳場の前を通つて、真つ暗な廊下を歩いた。誰もいるはずはなかつたが誰かに見られているような気もした。廊下の角を曲がるとリンシヤムが現われるのではないかという馬鹿げた不安と奇妙な期待が私の頭に浮かんで消えた。

ナーザの吐く息の音がやけに大きく感じられた。

一階には客室はなく、寝ているのはコアルト老人だけのはずだつた。ほとんど手探りでそれらしき扉の前に来た。二度、三度、扉を叩いた。かちりという音がして細く扉が開いた。角灯の光が目まぶしい。

「誰だね、こんな夜更けに……」

コアルト老人は私とその後ろのナーザの顔を認めた。

「少しばかり開きたいことがあるんだ。中に入れてはくれないか。沼に棲むものとリンシヤムの話だ」

コアルト老人は黙つてうなずいた。

主の部屋は客室と同じくらい質素だつたが、壁には書棚が作り付けになつていて、ぎつしりと古びた本や羊皮紙の束がおさまつていた。

「コアルト爺様に開きたいのよ。沼にいる何か、知つてるんでしょ。こんなに本持つてるのは爺様だけだもの。リンシヤムは怪物なのよ」

私は今までのことを急いで老人に説明した。主は黙つて小さくうなずきながら話を聞いた。次第に表情が曇つてしわが深くなつていくようだつた。

「わかつた。あの女には何かあるのだろうとは思つていたが……」



ナーザの話は噂としては聞いていたのだ。恐ろしいことだ」

コアルト老人は書棚から一冊の分厚い本を引き出した。

「わしの三代前の先祖がまとめた『ロラストの魔』という本だ。このあたりには昔から得体の知れないものの棲むという沼や森が多くある。ゴープの沼についても記されている」

老人の褐色の手が古びた頁をめくった。文字はウォオレンのようだがかなり古い書体でほとんど読めない。老人が指差した所に墨で描かれたあの沼の絵が張り付けてあった。百年ほど前の風景だが今とほとんど変わりはなかった。ただひとつ沼の中央に立つ小さな社を除いては、だ。

「あの沼に何があるのかはわしにもひい爺さんにもわからんよ。ただずつとずつと昔から何かわしらとは違うものが棲んどる、沼には近寄るなどという言い伝えだけがあった。その理由についてはもう失われてしまった。この絵に描いてある小さな祠も誰が建てたのかわからん。こんな様式はこの近くのどこの村にも残っていない。都にもないだろう」

私は見たことがないと答えた。切り妻型の屋根がついたそれは全面を複雑に入り組んだ模様で覆われており、その絵を見ていると模様の中へ吸い込まれていくような錯覚を感じた。

「この模様はリンシャムの家の洋灯についてた模様似てる」

ナーザが言った。そう言われてみると確かにあの銀の打ち出し模様とこの社を覆う模様には共通点があるようだった。

「はつきりしたことは何もわからない。大昔にはここである種の祭祀が行なわれたという話もあるがあまり信用は出来ない。この社はわしの爺さんの代に土台が腐って沼の中へ沈んでしまった。その晩、沼の方から重くて大きな、苦しげなうめき声のようなものが聞こえてきたという記録がある。これは確かなことだろう。幾人かの村人が書き残していることだ。その事件で忘れられそうになっていた沼に対する恐怖がじわじわと沸き起こって、今でも沼に行く奴はいないというわけだ」

「あいつが何なのかはわからないの。どうやったら退治出来るかは？」

コアルト老人は苦い顔付きで本を閉じた。

「デウムは沼に棲んでいた何かと手を結んだのだろう。魂をくれてやったか、ま、そんなものがあるとしての話だが、あるいは男どもの命を代償にか、美しさを手に入れたんだろう。何を考えてそんなことをしたのかはわからん。何か大きな企みがあったのか、それとも単に美しくなりたいという望みが昂じたものなのか」

「どうしたら、奴を倒せる？ 剣で傷付けることは出来たが、果たしてどめを差すことまで出来るのか」

コアルト老人は首を振りながら答えた。

「わからん。半分はデウムの、生身の人間の体なのだろうが、もう半分はこの世のものではない。魔道に精通した者が必要だろうが、この村には魔道師はいない」

そのとき廊下に足音がした。泊まり客が起きてきたのだろうか。しかし、厠はこちらにはない。ここに来る用はないはずだ。

ぎしりぎしりと足音がする。忍び足と言うわけでもなく、無造作に進んで来る。誰が、いや、何が来るのか。

扉が開いた。革の胴着を着た若い背の高い男が立っていた。無表情に部属の中を見回す。

「こんばんは、コアルトさん。そ……その御方に用があるので……」

男は場にそぐわない静かな、どこか滑稽な調子で台詞を吐いた。

「ベート！ そいつはリンシャムの虜になった奴だ！ 神隠しにあった奴だよ！」

ナーザが叫ぶ。ベートと呼ばれた男はその声は全く耳に入らないようで、与えられた台詞を続けた。

「コアルトさん、わ、私はその男の方とナーザに用事があるんですよ。さあ、お二人さん、私と一緒に来てください」

言葉は続きましたがって抑揚や調子をなくし、不自然極まりない

ものとなっていった。だが、その間にも男はじりじりと前へ進み、私たちに近付いてくる。

「帰れ！化け物、おまえらの正体はわかってるんだ！」

「コアルト……さ……ん……」

ベートの口は壊れた機械のようにそこで動かなくなつた。かわりに体が動き出した。後ろ手に隠し持った短刀を手に奴は飛びかかつて来た。

こいつも鍛冶屋の息子と同じく身が軽い。中身が空っぽなのだから当然といえば当然であるが。

奴は宙を飛ぶように短剣を光らせて来る。私は剣を抜き斬りつけた。

刃と刃が噛み合い火花が散る。

奴には剣技と言えりようなものはなかつたが恐怖心がなくやみくもに振り回すのには閉口した。

ベートの短剣が私の左腕をかすめた。痛みが走り暖かいものが噴き出る。その途端、私は床に敷かれたじゅうたんに足を取られ、構えを崩した。

奴の剣が来る。ナーザの悲鳴。

剣が止まった。コアルト老人がベートを羽交い締めになっている。

私は飛び起きた。ベートが老人を振り払う。宿の主は本棚にぶつかり、上からほこり臭い書物がばらばらと落ちてくる。

私は剣を奴の横腹に叩き込んだ。膿のような体液が噴き出、上半身が半ば千切れて背中の方へ引つ繰り返る。だが腰から下は上半身を引きずるようになおも進んで来る。

すねを蹴飛ばし、奴を床にひっくり返すと、足と腕、首を切断した。部屋の中に悪臭がただよう。ベートの身代わりの内側の方はどうやら腐敗し始めているようだった。

「こいつを見れば村の連中も話を信じるかもしれない」

ナーザが口を押えながら言った。

「いや、わからんぞ。女たちはともかく、男どもは皆リンシヤムの

奴隷みたいなものだからな。この年のわしでもあれの美しさにはくらくらと来たくらいだ。街道を北に下ったフロガンの村には力のある魔道師が住んでいて聞く。力を借りるほかなからう」

そのとき、聞こえてきたものがあつた。ごく低い音で、耳に聞こえると言うよりは体に直接響いてくるような音。地震の前触れかのようなごうつという低い音がどこからともなく響いた。それは何か意志あるものが漏らす声のようにも聞こえた。苦悶と怒りに満ちたうなり声のようにも聞こえた。

「何、あの音」

ナーザが私の手を握った。コアルト老人は眉間にしわを寄せ首を振る。

「ねえ、ランケン、あの音は……」

音は一度止んだがすぐにまた起こり、うねりをもって断続的に続いた。

「何なの、あの音」

ナーザは誰に聞くでもなく言った。私もコアルト老人も同じことを言いたかつた。

「沼から聞こえて来た音というのはこんな音だったのかも知れないな」

老人は頭を振りながらつぶやいた。

音は次第次第に大きくなり、かすかながら床が揺れているようにも感じられるようになつた。

寝台の上の窓に白い光が射した。ぼうつとした弱い光だが、まだ夜明けには早過ぎるはずだった。

私たちは異臭を放つ死骸を後に、宿の外へ出た。村はひっそりと寝静まっている。

沼の方向の空が白く光を発していた。家々の屋根と木々の向こうの夜空に灰色じみた白い光がゆらゆらとうごめいているのだ。地鳴りのような音はますます大きくなっていく。

「斬られた苦痛のためか、それとも正体を知られたからか、奴は何

かをしようとしているようだな」

コアルト老人が我々の意見を代弁した。

「何が起ころの」

「わからんよ」

「沼へ行ってみよう、ここでこうして異変を眺めていてもしょうがないさ」

私の提案は無謀なものと思われても仕方がなかった。まだ私の中にはリンシヤムの呪縛が根をはっていたのかもしれない。まだ私はあの女を抱きたいと思っているのだろうか。

真夜中の黒い夜空に薄い絵の具を染みこませたように白い光がゆらめいている。よく見ていると時折、かすかな稲光のようなものが地上から空へと登っていく。

「ランケン！」

気がついたのはナーザだった。空にばかり気を取られていた私たちの背後に近寄ってくる一団があった。暗くてよくわからないが十人ほどの人が歩いて来る。どことなくぎごちなさのある歩き方だ。

「また、我々に御用があるというわけらしいな」

奴らは夜目がきくのか、私たちに発見されたことに気付いたらしかった。一斉に駆け出してきた。手に手に得物を携えている。

「逃げろ！」

私は老人とナーザの背を叩いた。

私たちは懸命に走ったが、奴らの足は異常に速かった。兎が跳ぶように宙を切って迫ってくる。

先頭の男の剣が私の外套の裾を切り裂いた。私は振り向きざまに奴の首に剣を食い込ませた。異様に軽い手応えだ。こいつらも皆リンシヤムの排泄物で出来た木偶人形なのだろう。

二番手の腹を突き、三番手を肩から腹まで斬り開いた。剣には奴らの体から噴き出る粘つく体液がからみつき、切れ味が鈍っている。

村の入り口の松明が見えてきた。どうやら門番はこの騒ぎにも気

付かず、眠りこけているようだった。

びゅうと空を切る音がして、三体の化け物が私たちの頭上を跳び越して、村の門の前に立った。松明の光を浴びた三人の男の顔は硬直した笑いのようなもので固まっている。彼らの姿形はまさしく人間そのままだが、同時にその姿は全く人間とは言えないものでもあった。

私は剣を振りかざし突進した。髪を肩までのぼした男が幅広の山刀で斬りかかってくる。右にとんでその刃を避けると奴の左肩に剣を叩き込む。

どつと倒れる奴を蹴飛ばして次の怪物に向かった。こいつは派手な赤い胴着を付け、脂で固めた口髭などを伸ばしていた。生きている時にはさぞかし女泣かせだったのだろうか。

色男の剣は私の首を狙って繰り出されて来た。二本の剣が十文字に組み合う。力任せに押し切つて奴の脳天を負つ二つにした。

信じ難いことが起こった。奴の頭からは噴水のように真っ赤な血が噴き出したのだ。口の辺りまで二つに裂けた頭から、どくどくと血が溢れて、私に降りかかってくる。

ナーザの悲鳴が響いた。

「身代わりだけではないんだ！ただリンシヤムの妖術に操られている者もいるのだ！」

コアルト老人が叫んだが、今となつては遅かった。どのみちこいつは斬らなければならなかったのだ。

私は一瞬の時間で自分にそう言い聞かせて、残ったひとりの敵に向かつて行つた。

やや背の低いこの男は古道具屋から持ち出して来たような錆の浮いた長剣をおぼつかない手付きでつかんでいた。だが、私を殺そうという意志の強さに変わりはなかった。短い叫びをあげて奴は斬りかかつて来た。

「ペンド！ペンド！」

ナーザが恋人の名を叫んだ。錆びた剣の男の前に駆け寄り、両手

を広げて立ち塞がる。

「ランケン、止めて。ペンドを斬らないで。今、見たでしょう。まだ、人間かもしれない！」

ナーザの黒い瞳の中に松明の光が映ってゆらめいた。零れた涙の中を光が伝わって落ちていく。

彼女の後ろでゆっくりと錆びた剣が振り上げられた。ペンドの顔には生きたものの証は何もなかった。蠟細工の人形のような顔は松明の熱で溶けだしたかのように歪み、輪郭がぼやけて見えた。

「ナーザ！どけ！」

私は彼女の肩をつかんで押し除けようとしたが、その時錆びた剣は振り下ろされた。

重い、肉が裂けるような音がして、剣はナーザの首筋から胸の当たりにまで食い込んで止まった。ペンドの身代わりは剣を引き抜こうとしたがそれはナーザの体にしっかりと入り込み、動かなかった。

血が噴き出し、乳房の間から飛び出した剣を伝ってぼたぼたと滴り落ちる。化け物は剣を抜こうと前後に揺さ振り、事切れたナーザの頭がその度に前後ろにがくがくと揺れた。

私は大きく剣を振りかぶり、ペンドの姿をしたものの頭蓋を叩き割った。ぐしゃりと、腐った果物が潰れたような音がして、奴の頭は形を失くした。赤い血は出なかった。腐った肉汁のような物が飛び散っただけだった。

人間とそうでないものの遺骸は重なり合って崩れ落ちた。

新たな足音が背後から迫りつつあった。松明の明りの輪の中で十を超える刃がきらめく。

私たちは森の中へと逃げ込んだ。沼の方からの白い光はますます強くなり、森の中でさえ、何とか足許を確保出来た。音は断続的に続き、その度に小さな地震のように地面は揺れ動いた。

この先に何かがあるのか、皆目見当はつかなかった。私たちの進んで行く道は危険と恐怖につながっていると考えるのが妥当な所かも

しれなかったが、後ろからは小枝を振り払いながら近寄ってくる異様に軽い足音が迫っていたし、また、私の中の何かは沼とそこから現われたものに引かれていたようだった。

木々が途切れて、私たちは白く光る沼の岸に立っていた。

先刻、リンシヤムと沼の奇怪な交わりがあった時のように沼は白い光を発していた。だが光は何倍もの強さがある。水面自体から発する光と水中深くからゆらゆらと煙のように立ち上ってくる光が混じり合い、天に向けて放たれている。地の底から響いてくる音はここでは私たちの全身を震わせる強さで、音が起る度に水面は激しく波立ち、光が火花のように弾けた。

「何が起きるんだ？」

コアルト老人は無言で首を振った。

重苦しい音が途切れ、代わって草を踏み木の枝が折れる音がした。私たちは十数人の男たちに囲まれていた。リンシヤムの妖術に操られた肉人形どもだ。何人かは血の通った人間なのだろうし、そいつを斬れば悲劇が起るのかもしれない。私たちが生き残れた場合の話ではあるが。

最初の敵が剣を振りかざしたとき、それは起こった。

水面に巨大な水柱がたつた。どうどうという音とともに水は木々の梢の上までも立ち昇り、沼の周りに大粒の雨を降らせた。水滴は一粒一粒が白い光を発している。

私たちを取り囲んだ奴らは急に力をなくし、だらんと腕を下げた。幾人かはその場に倒れてしまう。

水柱はだんだんと低くなり、腰まで位の高さになって沼の中央を泡立たせた。その中からひと際強い光が射したかと思うと何かが浮かび上がって来た。

黒い長い髪が白い光の中をまるで生き物のようにうごめき、流れている。一糸まとわぬ姿のリンシヤムが光に包まれて水面に立っていた。

コアルト老人の喉から細い笛のような息の音が漏れた。泡立つ水

面に立つリンシヤムはまさしく神の如き美しさだった。白い肌の上を光る水の粒がこの世の理を無視して下から上へと駆け上がって行く。豊かな肉体を誇示するように妖しい仕草で両の腕を頭上にもたげる。白い体の中で、唇と乳首と繁茂の中の秘唇だけが赤く見える。瞳は閉じられていたがほのかな赤みを帯びたまぶたの裏からは何者も抗い難い見えない力が発せられていた。

周囲では奇怪なことが起こっていた。私たちの周りに棒立ちになつていた、あるいは倒れていた身代わりの男たちは、本来の姿に戻りつつあつた。熱でとろける蠟細工のように目鼻が崩れてどろどろと流れ落ちていく。音を立てて手に持った剣が落ちる。指が崩れる前に腕や手首が溶けてしまい、腕ごとぼとつと落ちる者もいる。

化け物どもは次々と形のない膿と吐瀉物の固まりのようになり、ずるずると沼の中へと流れていく。それは沼の水に触れると白い湯気を出して中へ消えていった。

三人の男はどうやら本物の人間だったらしく、夢の中をさま迷っているような様子で立ち尽くしていた。

リンシヤムはゆつくりと腕を広げさし招くような手付きをした。私は奇妙な息苦しさを覚えて、膝をついた。胃の腑がよじれるような感覚があつた。一物が痛いほど固くなつていった。三人の男たちはふらふらと沼の方へと歩き出した。剣を放り出し、沼に立つ妖美の化身に身を捧げんと進んで行く。

私は行くなと叫んだつもりだったが全く声にはならなかった。私は彼らの身を案じているだけではなく嫉妬もしていた。リンシヤムは私のものだ。リンシヤムが求めているのはこの私だ。そう、心の中でわめいている声があつた。

彼らが沼に足を踏み入れると白い蒸気が上がり肉の焼けるような臭いがした。だが苦痛の声は聞こえない。

白い光の中に浮かびあがつた三人の影に変化が生じた。髪が逆立ち、衣服が裂けて飛び散り空中で燃え尽きる。体の到る処から鮮血

が噴き出した。不可視の力が皮膚に無数の穴を開け、細い血流が八方へと噴き出していく。魔術によつて結果が生じているのだろう、血は綺麗な曲線模様を描いてリンシヤムへと宙を流れていく。赤い噴流はリンシヤムの肌を汚すことなくその中へと吸い込まれていく。

ぶつぶつという音がして、三人の体から肉が剥がれだした。肩から、腕から、足から固まりとなつて剥がれた肉は血と同じ道筋をとつてリンシヤムへと飛んで行く。それは宙を行く内に千切れて細かいかけらとなり妖女の肌に届く頃には半ば液状の流れとなつて吸い込まれていくのだ。

臓物もまた同様にリンシヤムへと消えていき、もはや三人の男は白い骨をさらしている。その骸骨もまた、乾いた音をたてて砕け、白い粉のようになつて吸い込まれていった。

リンシヤムの白い頭には満足気な笑いが浮かんでいる。三人の血と肉と骨を余さず吸い込んだその体はますます美しさをまし輝いているようだった。

彼女はゆつくりとまぶたを半眼に開いた。

鳶色の瞳が下弦の月のように見える。瞳の奥からは赤い光が射しているようだ。その光はまるでそれ自体重さを持った物質であるかのように私に突き刺さり、絡み付き、沼へと引つ張り込もうとする。

足が他人の物のように動いている。草むらをかき分けて足が勝手に交互に動いて沼へと進んで行くようだった。

もはや、リンシヤムの下へと行くことは当然のことのように私のぼやけた意識はとらえていた。この力に抵抗することは不可能であり、またその必要もないような気がした。神の如く美しい女が私を待っているのだ。何も考える必要はない。至上の快樂が、夢のような魂と肉体の快樂がすぐそこに待っている。私の股間のものがそう語っている。意識があるのは頭ではない。いきり立った一物が私の意志だ。

白く光る沼がすぐそこにある。揺れる水面は乳色から透明な蜜のようにと変化を繰り返しながら、光を乱舞させ、私を招いている。ゆらめく大理石模様の奥に何かがうごめいているのがちらりと見える。それは私に一瞬正常な意識のかけらをもたらしたがすぐにリンシヤムの笑みがそれを打ち砕く。

彼女は手を差し伸べている。終わることのない官能の世界に招いている。私は行かなければならない。

しわのよった腕が私の首に巻き付いた。ざらざらとして骨張った指が喉に食い込む。指は幻の殻を突き破り、食い込んでくる。耳元ではわけのわからない叫び声。

割れていた現実のかけらが合わさり、私は状況を把握した。

コアルト老人が後ろから襲いかかり首を締めつけていた。年寄りとは思えない力だ。目の前の白い光が薄れ、暗闇がやってこようとしている。

私は老人の脇腹に肘打ちを食らわせた。指の力が緩む。腕を振り払い、突き飛ばした。

このとき、私はリンシヤムに背を向けることが出来たことに気付いた。すうつと頭の中に冷たい風が吹き込んで来るような感覚に襲われた。目の前に広がる光景がひどくおぞましいものを感じられてきた。

草も木も地面も皆、光に照らされて骨のように白く見える。暖かくも寒くもない、ただ長の年月風雨に晒された白骨で造られた箱庭のように見えた。その白い光景の中に点々と赤や朱色の物が散らばっている。どろどろに溶けた身代わりが沼に帰って行った後には奴らの残滓が草や土の上に残り異臭を放っている。

三人の哀れな男が分解された所にはリンシヤムが吸い残した血と肉と骨のかけらが散らばり、仕事嫌いの男が掃除した屠殺場の様相を呈していた。

コアルト老人は血走った目に情欲と憎悪をみなぎらせて立ち上がった。股間が張っているのがいかにも醜悪であり滑稽にも見え

た。彼の目は私をにらみつけると同時に私の背後のリンシヤムへと注がれている。今、振り向くとリンシヤムはどんな姿に見えるのだろうか。

コアルト老人はかっくと口を開き叫び声を上げ、襲いかかって来た。

「止めろ！」

私は怒鳴ったが、妖女の術中に落ちた男には意味のない音にしか聞こえなかったことだろう。コアルト老人の心中には何十年ぶりかで燃え盛る炎が渦巻いているに違いなかった。消え去ったかと思っていた本能がまるで十五才の少年のように燃え盛っているに違いなかった。

老人の細い菱びた腕は私まで届かなかった。その前に恐ろしい運命が老人を襲ったからだ。

三人の男に起こったことと同じことが起こった。信じ難いほどコアルト老人の顔が歪んだかと思うと眼球が飛び出し、ぽっかり開いた眼窩から血がほとばしった。鼻からも口からも耳からも真紅の液体が噴き出した。しわのよった肌に次々に穴があき、血が噴き出る。その様は、内側から大い針で誰かが突き刺しているようだった。

あつという間に老人の体は幾十もの肉片に裂けた。頬の肉が剥がれ、白い骨が露出する。腹の肉が裂けた後からは臓物が溢れ出したが、地面に落ちる前に宙を飛んでリンシヤムの下へと吸い込まれていった。

宙を飛ぶ血流と肉片が私の頬を打った。生臭いにおいを標わせながらコアルト老人だった物は空中を流れていく。白い骨も煙の噴流となつて消えた。

声が聞こえてきた。頭の中に、いや体全体の中に柔らかく響いてくる超自然の力による声だ。

「おいで、こちらを向いておまえの顔をみせておくれ、邪魔者はおもういらない、私とおまえだけだ、さあ、こちらへ……」

耳には聞こえぬ声は体の中からとろかしていくようだった。天鷲絨のような肌触り、蜜のように甘い声が私を招いている。

私の意志はまたもや揺れ動いた。眼前の荒涼とした光景もリンシヤムの声の魔力に幻のように消えていくようだった。このまま振り向き白い腕の中に飛び込めば天の国が待っているのかもしれない。私は一度それを経験している。ナーザの声で破られたが夢は覚めることがなければ現実と何も変わることはない。

呪縛が破られたときの恐怖感意識の奥底へと迫いやられそうになつていた。私はリンシヤムに関するおぞましい出来ごとを幾度も見ている。沼の底から水蛇のように現われる姿、男を引き裂いて股間に吸い込む血みどろの交わり、沼のものとの吐き気を催す情交とその後の信じ難い肉人形の創造、傷口の中に垣間見えた不気味な物。だが、目に焼きついたそういつた光景でさえ、妖し気な薄絹の向こう側で何かひどく魅惑的な情景に変貌していくような気がした。

私は剣を取り落とした。剣は何か固い物に当たってがらんと音をたてた。その音は寺院の鐘の音のように私の肉の耳に響いた。

私は足許を見た。剣は白い棒のような物に当たって音をたてたのだ。骨だった。リンシヤムが吸い残したコアルト老人の骨の断片だった。

私はかがみ込み、剣と、骨とを拾い上げた。腕の骨のようで掌ほどの長さに折れ、乾いていない血がこびり付いている。

途端に目の前の物すべてがくつきりと現実味を帯びて見えてきた。私は全身にコアルト老人の血と肉と骨の噴流を浴びていた。服には血が染み込み、重く、肌にまとわりつき不快その物だった。一瞬視界が赤く染まった。まぶたから血が流れ落ちたのだ。

目を拭い、体のあちこちについている肉片を払い落とした。恐慌に近い衝動的な感情が起き、私は大声で言葉にならないことを叫んだ。

振り向き、白い光の源の人影を見据えた。私はそこに見るにおぞ

ましい怪物の存在を無意識の内に予期していたが、目にうつったのは天の使いか、魔界の娼婦のように美しく艶やかなリンシヤムの姿だった。

私は剣をかまえて突進した。リンシヤムは殺さなければならぬ。この魔物を滅ぼさなければならぬのだ。

だが、一步一步近付くごとに私の意志は弱くなっていく。体から力が抜け、足が鉛のように重くなっていく。頭の回りにもやがかかったように正常な意識が薄れていく。

リンシヤムは白い体をゆるゆると踊るようにくねらせる。死と性が重なり合った桃源郷への誘いの舞이었다。

まぶたが開かれ、赤く縁取られたようなきれいな目が見える。鳶色の瞳はその色をなくしたように透き通って見え、その向こう側から不可視の赤い光が射している。その赤光は私の脳を焼き尽くし、無意識の獣に変えようとしている。

私はリンシヤムの全身をなめるように見ながら沼へと近付いていく。足は私の意志で動いているのか、リンシヤムの力で動いているのかわからなくなっていく。剣が重い。

私は白い光に包まれた美と官能の化身を見続けた。半ばリンシヤムの意志、半ば自らの意志で。目を凝らすと見えたものがあつた。それは彼女へと近づく内に次第にはつきりと見えてくる。私の脳はすべて灰になつてしまったわけではないようだった。

リンシヤムの白い肌に一筋の赤い線が見えた。左の肩から乳房を通りへそにまで達する赤い線が見える。頭の中で剣をふるった記憶が爆発した。

途端にその赤い線が裂けた。ぱつくりと傷口は開き、血が噴き出した。血は白い肌の上を上に下に虫が這い回るように流れる。

「おまえは化け物だ！おまえは幾人もの人間を殺した！おまえは怪物だ！私が殺す！」

私の叫び声に返って来たものは身の気もよだつような笑い声だった。体の内側に広がる甘い声で彼女は笑ったが、私は恐怖に総毛

だった。声は続いた。

「おまえには私を殺すことなど出来はしない。おまえは生身の男だからね。こちらへおいで、剣を捨てて。剣はおまえの自前の物さえあれば十分。おまえは私を抱きたいだろう。おまえは私を抱きたい。この肌に触れたいだろう。私の唇はおまえの物だよ。快楽が欲しいだろう。おまえは私を抱きたい……」

リンシヤムの声は手足の指先まで行き渡り細かな振動で私の体を内側から崩していくようだった。

リンシヤムは溢れ出す血を両手で拭い乳房や下腹に塗りつけた。白い肌に真紅の模様が描かれ、それはひどく淫らな有様だった。

「さあ、おいで、来るのよ、ランケン」

リンシヤムは私の名を呼んだ。そう言つて彼女は傷口を両手で大きく左右に押し開いた。左右の肉ひだの中にうごめく穴が見える。それは巨大な女陰と化していた。透明な蜜を吐き出し、ぬめぬめとうごめいている。リンシヤムは自らの手で肩から腹までに開いた淫裂を撫で回し、恐ろしい淫欲に満ちた笑いを上げる。裂け目から溢れた血と蜜はリンシヤムの体を流れて足の先までを覆い尽くして行く。

「私はおまえを殺す！おまえを滅ぼす！」

私は絶叫した。だが、声は情ないほど小さなものに過ぎなかった。

剣を振りかざすと鎖に繋がれたような腕に渾身の力を込めてリンシヤムに投げ付けた。

リンシヤムの顔につかの間驚きのような表情が浮かんだ。剣は宙を飛んで行くがその速さはどんどん遅くなっていく。白い光の中を飛ぶ内に刀身は輝きを失くし、ぼろぼろと刃が毀れていくのが見える。

だが、剣は粉塵と化す前に、形をとどめたままリンシヤムの腹に開いた女陰へと突き刺さった。

妖女は苦痛と快楽が入り混じったうめき声を上げ、のけぞった。

剣は深く裂け目の中心に突き刺さっている。と、見る見る内に肉のひだは左右が合わさり、一筋の赤い傷口へと変容した。

腹に突き立った剣は背中まで突き抜けている。リンシヤムの口からごぼりと血が吐き出され赤い唇をさらに真っ赤に染めた。

白い光が急に薄れていく。水面の光はほとんどなくなり、リンシヤムの体とその下の水だけがぼうつと蛍のように青白く光っている。

リンシヤムは首をがくりと垂れて意識がないかのように宙に浮かんでいた。爪先が時折水につかり小さなちやぶちやぶという音をたてた。そして、再び、顔を上げた。血にまみれたその顔は青ざめ、目の下には深い隈が出来ている。それでも、その美しさには変わりはなく、私は彼女の腹に突き刺さった剣に目をやるとかすかな後悔の念に補われた。

リンシヤムは剣の柄に手をかけ、それを引き抜いた。ぬるりと血塗れの刀身が現われ、傷口からは血が噴き出す。血は自然の法則に従い、水面へと流れ落ちて水音を立てた。

彼女は剣を沼へと落とした。切っ先が水面に着く直前、白い光と共に沼の中から現われたものがそれを受けとった。

それは目鼻のない蛇のようであり、蛸の足のような吸盤らしき物が幾つもついている。それは剣を絡め取って、高く差し伸べると締めつけた。剣は粘土で出来ているかのように砕け散った。

「私を拒むことは出来ないわ。おまえは私のものになる。おまえの中には私が入っているのだから」

リンシヤムの声は生々しく、まるで肉の耳に聞こえる声のようだった。私は沼の水を飲んだことを思い出した。水は既に私の体の一部となっていることだろう。猛烈な吐き気に襲われたが何も出てくる物はなかった。

触腕は水中に姿を消した。同時にリンシヤムの体がすうつと宙を昇って行く。二人の背丈ほどの高さで止まり、空中でゆっくりと足を開いた。股間から何かねっとりしたものが滴り落ちる。沼は再



び光を増し始め、その明りを受けて光りながらねばつくものがリンシヤムの股間から沼へと落ちていく。

沼からもそれに答えるものがある。リンシヤムの真下の水面が泡立ち不定形の物が見え隠れする。剣を砕いた触腕と同じようなものがくねくねとうごめき、またもつと大きい丸いぶよぶよしたものが水の上に浮かびあがってきた。

沼からのものはリンシヤムの落としたねばつくものを浴び、それを求めるように水面から伸び上がって行く。何本もの細い触手が絡み合い袋状の物がその上を這い上がるように幾つも幾つも水の中から現われる。

リンシヤムの秘唇は大量の粘液様の物を吐き出し続ける。どろどろとしたそれは透明から薄黄色のものが交じったものになり、沼からのものを覆っていった。

沼のものは七イート（約二メートル）ほどにまで立ち上がり、それ自体も光を放ち始めた。女から滴るものは間断なく沼のものの頂部に達しリンシヤムと沼のものは一体になっているかのように見える。

粘着質の音がして、リンシヤムから肉色の固まりが落ちる。身代わりの肉人形をつくったあの排泄物のようなものがぼとぼと噴き出して落ちていく。股間が裂けて、臓物が飛び出しているかのように、肉色の半ば固形状のものを吐き出し続ける。

黄色味がかつた蜜状のものとどろどろの肉状のものは信じ難いほど大量にリンシヤムの女陰と尻から噴き出し続けた。互いに混じり合いながら落ちていくそれは沼からのものの上に堆積していく。沼から突き出した円錐状のものはどんどん彼女の体との距離を縮めていった。それは引っ切りなしに形を変えて、柔らかい表面を震わせ、膿のようなものに覆われながら成長していくのだ。

成長していく？一体何が産まれると言うのか。

その答えは今出ようとしていた。

にひとつの大きな固まりとなり、鬼女はもう宙には浮かんではいない。固まりの上に大きく足を開いて股がついているのだ。その股間からはとどまることなく白と黄と朱の入り混じったぬめるものが流れ出している。

全身を激しくゆさぶる強さでリンシヤムの笑いが体内にこだまする。

「さあ、私を見なさい。私は美しいだろう。私は美しい。私を見るんだ。おいで……」

水面が激しく泡立ち、何本もの触腕が躍り出た。リンシヤムの姿が空中高く押し上げられていく。沼のものが全身をあらわにしようとしているのだ。

光る水飛沫を一面に飛び散らせながらそれは浮かびあがった。立ち上がったというのが正解なのだろうか？本来の大きさなどは私に知る由もない。

リンシヤムの白い体は沼を囲む木々の梢の上に見える。その下に彼女の体の数十倍ある歪んだ円錐形のもの小山のように盛り上がっているのだ。

それは無数の深いしわとひだに覆われ、水と粘液を滴らせている。大量の吐瀉物と汚穢にまみれた巨大な臓物の固まりとでも言えばその姿を言い現わすことが出来たことになるだろうか。大は牛ほど、小は人の頭ほどまでの丸い袋のようなものが腫れ物か何かのように無数にその体を覆っている。表面は肌色と朱色、桃色がでたらめな斑模様を成していたが、所々は腐ったような紫や緑がかつた色に見えた。何十本ものくねる触腕は腐敗した果実に群がる虫のように見える。触腕は一本一本がそれぞれ異なった形をしており、吸盤状のものが幾つもついたものや、細い髭のようなものが先端に無数に生えているもの、得体の知れないらっぱ状の器官がついているものなどが相互に絡み合いながらうごめいているのだ。

私は草の上に膝をついて、痴呆のように目の前にそびえるものを見つめていた。頭の奥の方がしびれたような感覚があり、考える速

さが奇妙に遅い。これは何なのだ。この、巨大なおぞましさを固まりのようなものは？

生臭いねっとりとした悪臭が鼻を刺す。思考はほとんど停止しているようだったが、知覚だけは異様に研ぎ澄まされ、目の前のものの姿、音、臭いが体の隅々に食い込んでくるようだ。

私の目は一本の小さく垂れ下がった触手を見出した。それは先刻、この場所でリンシヤムを貫いたものだった。沼の一物は、今、不能者のように萎えていた。私はこの二つのものが合体した怪物の支配者が誰であるかを知った。

「おいで、ランケン、私を抱くのよ、私を抱いて、ランケン」

声体が震わせた。触腕が何本も私に絡み付いてくる。腕はどれも見るだにおぞましいものだったがその感触は柔らかく、心地よかった。ぬるぬるとした蜜を滴らせたものが首に、腰に、足に巻き付き、私の体を宙に持ち上げる。ぶるぶると震える触手の先端からは更に細い長虫のようなものが生え出し、私の肌に吸いつき、愛撫する。私の股間のもはまた固くなっていた。

私はゆっくりとリンシヤムの待つこの化け物の頂部へと運ばれていった。目の前を沼のものの複雑に入り組んだ姿が下に流れていく。その姿は休むことなく揺れ動き、脹らみ、萎み、不規則な鼓動を続ける。奇怪その物であるはずのそれは次第次第に美しいもののように見えてくる。脳の中に新しい感覚が生まれて行くようだ。美意識の範疇が一気に広がり、想像もしなかった美しさが理解出来るようになっていく。今までの狭い美的秩序という意識が崩れていくのがわかる。

このものは美しい。折り重なったひだのひとつひとつがえも言われぬ曲線を描き、袋状のものは素晴らしい無秩序の美を成して構成されている。触腕の優美さはどうだろう！

先程までの悪臭は甘美な香りへと成り代わった。香り自体が変わったのではない。私の臭覚その物に変化したのだ。甘い香りは肌からじかに体内に染み込んでくるようであり、心地よいけだるさ

広がる。

リンシヤムの待つ頂部までもうほんの少しだ。

そのとき、肉ひだの中からちらりと見えたものがあつた。美しい沼のものの体の中でそれは異質なものであった。明らかにほかの部分とは異なる丸く小さな凹凸のついた物がひだの中で動いている。

それは音を発した。体の中にはなく、耳に飛び込む音だった。

「ランケン！行くな！食い尽くされる！ランケン！リンシヤムを殺せ！」

その動くものがコアルト老人の頭であることに気付くまでには長い時間を要したような気がした。それからその音が老人の声であり、私に警告を発していることがゆっくりと理解された。

ひだの中に埋もれそうになりながらコアルト老人の首は怨念と諦めの入り混じった形相で、声を吐き出していた。

よく見ると顔は他にもあつた。深いしわの中に隠されてよく見えないがリンシヤムに虜にされた村の男たちの顔が幾つも幾つも苦悶している。

彼らは私の方を見、かすれた声を出していた。おまえも食い殺される。我々のように彼女の一部分になる。

それらの声はすべてが忠告というわけではなく、逆に私を誘い込もうという声もあるようだった。

私の知覚は閉ざされそうになり、まといつく匂いは耐え難い悪臭となつたかと思うと、次の息を吸う時にはまた甘い香りとなつた。沼のものは美醜の間を揺れ動き、ますます正体のわからないものとなつていく。

私はリンシヤムと対峙した。目の前三メートル（約一メートル）の所に彼女がいる。彼女の姿は感覚の揺らぎの中でも美しさを保っている。青ざめていた顔は血の気を取り戻しており、鳶色だった瞳は肉の目を通してさえもほとんど紅玉のように赤く見える。下腹から、肉付きの良い太股、ほっそりしたすねは自らの吐き出した粘液にまみれて、沼のものと融合しているように見えた。

体内の声がささやいている。淫靡な誘惑の音が脳の中を這いずり回っている。私を抱いて…私を抱いて…私を抱いて…

触腕は私をリンシヤムの前に送り届けると下の方に消えていった。代わってリンシヤムの白い腕が私に絡み付く。その感触は触手のものとはよく似ていたが、甘美な肌触りは比ではなかった。

赤い唇が近付いてくる。口元には吐き出した鮮血が乾かないまま幾筋も流れている。血塗れのリンシヤムはたとえようもなく美しく淫らだった。

リンシヤムは私を抱きすくめ、ささやいた。耳に入り込む肉の声だ。

「私は美しいでしょう。私を抱いて……」

一物が痛いほど固くなっている。この女を抱きたい。はらわたの奥までこのリンシヤムに私の剣を突き刺したい。

私は両の腕をのぼし、リンシヤムの背に回そうとした。

「殺せ！殺せ！ランケン、魔物を滅ぼすのだ！」

声はリンシヤムの背後の肉の山の中から聞こえてきた。どろどろとした粘着質のものを押し分けて、コアルト老人と幾人かの村人の顔が現われた。亡者たちの地獄めいた響きのある声がリンシヤムの至福の声と重なり合った。

「ランケン！リンシヤムを殺せ！こいつは化け物だ！殺すんだ！」

「……抱いて……私を抱いて……だ……い……て……」

リンシヤムは柔らかい体をくねらせながら押し付ける。乳房が胸の間でつぶれる。私はその重さを感じた。胸に当たる固い物がある。リンシヤムの乳房の中に埋もれている異質な固い物が私の意識を針のように刺した。

私は残されたわずかな意志の力を振り絞って胸元の隠しの中のそれを取り出した。

コアルト老人の骨だった。白い骨のかけらが私の手の中にあつた。私は骨を握りしめた。

「殺せ！」

「抱いて……」

私の取った行動は偶然の産物と言ってもよいものだった。また同じ場面に出会ったなら私の心の骰子は違う目を出すかもしれない。

私は握りしめた骨をリンシヤムの右目に突き刺した。

真紅の瞳が潰れ、眼窩の奥深く突き刺さった骨は、たちまち朱に染まった。

リンシヤムの腕は一瞬力をなくした。そして再び力を込めて私を抱きしめた。柔らかな唇が耳に押し付けられ、低い声が吹き込まれた。

「私……抱いて……私……は……美……く……し……い……で……し……よ……う……」

「ああ、きれいだ」

私はリンシヤムにそう答えると血染めの唇に口付けた。ぬくもりが消えていく。

コアルト老人と村人達のうめき声が聞こえた。彼らの顔は急速に形を失い肉色のものと粘液の固まりに帰っていく。その崩れていく顔には復讐の喜びといったものはなかった。ひどく悲しげな様子にも見えたが、あつというまに表情などは判別出来なくなっていた。

沼のものの巨体は大きく揺れ動き、触腕は次々と力をなくして水中に落ちていく。私の下でもある程度の硬さを保っていた肉状のものが、ゆるい粘土のようになって流れ出していく。房状のものは結合を解かれて沼の中へ落ちていく。

首の後ろに回されていたリンシヤムの腕も力をなくしてほどけた。その体からは白い輝きは失せ、最後の変化が起きようとしているようだった。傷口は再び開き血を噴き出し始めた。その回りの肌は張りを失い、灰色じみた木乃伊のようなものに変わっていく。真の姿、醜いデウムが姿を現わすのだろうか。

沼のものが激しく揺れた。幾つもの大きな固まりが水音をたてる。

ぐらりとリンシャムの体が前に傾いた。白いきれいな手が私の胸を優しく突いた。

リンシャムにまだ意識があったのか、偶然手が触れたのかはわからないが、私は沼のものから滑り落ちた。

水はなままたたかかった。上からは次々と半ば液状になったものが落ちてくる。私はねぼづく沼の中を岸に向かって必死に泳いだ。

重い体を岸辺に引っぱり上げ、振り向くと、沼のものは砂の城のように崩れ落ちていく。激しい水煙をあげて、それは水底へと姿を消した。白い影が落ちていくのがちらりと見えたような気もしたが、水飛沫と流動物の中に隠されて、すぐに消えていった。

私は草の上に倒れ伏した。ひどく眠かった。

まぶしい陽光にまぶたを突き刺され、目覚めた。

沼は静かだった。昨日、初めて訪れたときと何も変わることはなく見えた。朝日が木々の間から水面を照らし、鈍い金色の光を反射させていた。風はなく、波はない。昨日と同じく、死んだ風景が広がっていた。

私は岸辺を見渡したが、動くものはなかった。無意識の内に赤い衣をさがしていたが、あるはずもなかった。

喉が渇き、舌が口の中に張り付くようだった。水辺に降りて、一口すくって飲んだ。

水はかすかに甘く、不思議な心地好さがあった。

このままここで水音がするのを待っていたいような気がした。

だが、朝日は私を追い立てていた。私は沼に背を向けると歩き始めた。